opusdei.org

慎みを育てる(1) 少年期

人は、自己の内面をより深く 知るに従って、慎まして、 質に目覚めて行くもの心 自分自身を大切にする心 自分自身を対いにする 記事が勧める事柄。

2014/06/12

慎みとは何か。まず、それは他人に何か私達の個人的なものを他人の目から隠したいと望む恥じらいの感情

のように思える。多くの人が、慎み を単にみだらなことに対して反射的 に自己をも守ろうとする感情と考 え、また慎みを偽善と混同する人も いる。しかし、このような考えは表 面的に過ぎる。軽薄な人や内部の世 界を持っていない人には、慎みは必 要がなくなることを考えれば、この 徳のもつ価値がわかるだろう。実 際、動物には慎みは無縁である。そ れだけでなく、慎みは悪いことやみ だらなことだけに関するのではな い。よいことについての慎みもあ る。例えば、自分が受けたよい資質 を表すことに対する自然の抵抗がそ うである。

感情としての慎みは、この上ない価値をもつ。なぜなら、人がプライバシーを持つこと、つまり他人の目から隠すべき何かを持っているという自覚を前提とするからである。し、その他にも、この感情から生まれる、慎みという真の徳が存在す

る。その徳によって、人は自分の内部を、それをちゃんと理解してくれる人にいつどのように表すべきかを学ぶのである。

内部の世界の価値

かくして慎みは深い人間的価値をも つ現実として理解される。つまり、 人の最も価値のある部分である、内 面を守り、適切な分量で、適切な時 に、適切な仕方で、適切な状況の中 でそれを表すことができるようにな る。そうでなければ、人はぞんざい に扱われる危険にさらされ、あるい は少なくとも自分に値するだけの尊 敬を持って扱われない危険に陥る。 それどころか、個人的問題として も、慎みは自分を正当に愛するため に不可欠な要素である、正しい自己 評価を下し、それを保つために必要 である。「慎みがあれば、人は正し い価値観に従って、この『自己』を 肯定し受け入れる必要性をほとんど

『本能的に』表す」と言える(聖ヨハネ・パウロ2世、1979年12月19日の一般謁見)。慎みがないということは、自分が個性もなく重要性もない人間なので、自己の内部には普通の人には隠す価値のあるものがないのだということを示す。

慎みの魅力

慎みという言葉は、一感情であってもも徳であっても一様々な分野で使うことができる。最も厳密な意味にとをいては体を好奇の目から守ることととの内面の他の側面一例えば、含むの感情を表すことのそれ一もるといずれの場合も、慎みはつまるいずれの神秘と愛を守ると言える(『カトリック教会のカテキズム』 2522)。

一般的な原則として、慎みは私達の中にはより個人的なものがあることを他人に認めさせようとする。体を

例にとれば、人は、自分だけがもつ と考えるよいものを他人に知らせる ことができる手段(顔、手、視線、 ジェスチャーなど) に注意を引かせ るが。こう見てくると、衣服はこれ らの手段を補完するものであること がわかるだろう。服装によって他人 に自分は自分をどう見ているかを知 らせ、同時に他人に払うべき尊敬を 表すのである。かっこよさと上品 さ、清潔さとおしゃれは、慎みの表 れであると言えよう。慎みは、周囲 の人々に私達に対する尊敬を要求す ると同時に彼らに尊敬を払うから だ。逆に言うと、慎みが欠けると、 容易に身繕いにかまわず下品な格好 をしても平気になる。パドレはいろ んな機会に「慎みに気を配り、それ を保持するように、また人間の品位 を尊重するファッションを創り広 げ、真の美しさをないがしろにする 空気に抵抗を示すように | 励まして いる。

両親の模範と家庭の雰囲気

周知のことだが、教育においてよい 模範はいつも決定的な要素である。 もし両親が、また祖父母のように同 じ屋根の下で暮らす他の大人が、万 いに慎ましい仕方で接することがで きるなら、子供たちは互いに繊細で 慎ましい接し方をするのが家族の一 人一人が大切な人だからそうするの だと理解する。例えば、両親は子供 たちの前に互いの愛情を示すことが できるし、そうしなければなら ない が、一定の節度を守るべきことを自 覚せねばならない。これに関して創 立者は自分の両親が作り上げた家庭 の雰囲気を思い出してこう言ってい る。「彼らは子供の前ではたまにキ スをするくらいで軽薄なことはしま せんでした。子供たちの前では慎み を保ってください」と。冷たく振る 舞うことで夫婦の愛情を隠すと言う ことではなく、子供たちに大人らし

く品位をもって振る舞う必要性を示すことである。

しかしながら、聖なる慎みの表現は これだけで終わるのではない。家族 の中で生まれる信頼感は、各自の品 位を尊重して生活することと両立す る(親しき仲にも礼儀あり)。子供 たちの前で着替えをしたり下着のま までいたりするような、だらしのな い生活態度を許していると、遅かれ 早かれ家庭の人間的な格調が低下 し、だらしのなさが支配的になる。 特に暑い夏には注意が必要である。 なぜなら、気候や薄手の着物、ある いは夏期休暇の最中であることなど がかさなって、けじめのない生活に 陥る危険が高くなるからである。確 かに、季節や場所によって適切な服 装は異なるが、いつもきちんとした 身だしなみを保つ必要がある。この ように努めると、時に周囲の雰囲気 とぶつかることもある。しかし、 「だからこそ、あなたたちは固有の

雰囲気を身につけ、〈自らの調子〉 を自然に周囲の社会に与えることの できる形成を受けるべきなのであ る」(『道』376)。

もし慎みがなによりも内的な世界 (プライバシー) の表明と関係があ るなら、それを育てるためには人の 思いや感情や意向というような精神 的な分野まで問題にせねばならない ことは当然である。それゆえ、例え ば、自分のプライバシーと他人のそ れに関することをどう扱うかという ことにも触れねばならない。例え ば、誰かから打ち明けられた話を家 族の中でおおっぴらに話したり、噂 話に花を咲かせたりすることは教育 的ではない。このような会話は正義 に反する罪を犯す危険もあるし、子 供たちに他人のプライバシーに入り 込んでも構わないという誤解を与え ることになる。

同じように、メディアを通じて家庭 に入ってくるものにも注意が必要で ある。慎みとの関連では、気をつけ るべきことはみだらなことだけでは ない。なるほど、みだらなことは常 に避けねばならないとはいえ、より 危険なのは、あるテレビの番組や雑 誌において人々のプライバシーを 軽々しく侵害することである。ある 場合には、報道関係者の持つべき倫 理に反する厚かましい仕方で、また 別の場合には、キャスター自身が不 道徳な振る舞いをし、それで軽薄で 不健全な好奇心を満足させようとし たりする。キリスト教徒の両親は、 この「プライバシーをねたにして設 ける商売 | が家庭の中に侵入してこ ないように手段を講じるべきであ る。そして、どうしてこういうこと を許してはならないかを説明する。 「主体性を確立し、むやみに人目に さらされたくない、家庭内の悲喜こ もごもはそっと秘めておきたいとい う正当な望み | (『知識の香』69)

を尊重するべきだからだ、と。この 種の番組を流すためによく出される 言い訳(知る権利、本人の了承があ るなど)は、無制限ではない。人間 の尊厳から生まれる権利は不可侵 あるという制限がある。人の尊厳に 不正に損害を与えることは、た合理 本人が承諾していても、決して倫理 的に許されるものではない。

小さいときから

例えば、独りで体を洗い、衣服を着ることを学ぶこと。この習慣を身につける練習をしている間に、幼児よの日から隠されているよた、切である。また、可能な限り、着替えをする間はいるようであること、トイレにいがよい。 まな限りなること、トイレにいがようである。 まな限りなること、トイレにいがよい。

これらは良識に属することである (ひょっとしたら悪い意味での自然 主義が幅をきかせる社会において忘 れがちになっているかもしれな い)。また将来本当の徳を身につけ るのを助ける生活習慣を形づくって いくことを目的としている。それゆ え、もしあるとき幼児が家の中で慎 みのない姿で現れたり走り回ったり するのを見つけるなら、大げさにし かるべきことはないが、かわいいと 言って笑ってすませる(これは本人 のいないときにするべき) べきでは ない。そうではなく、優しく注意を

して、そのように振る舞うのはよくないことを明らかにするべきである。教育の問題においては、それ自体はつまらないように見えることや、その年代の子供には大した意味を持たないことがあるにせよ、そういったことも含めてすべてが大切である。

それと同時に、子供たちは他人のプ ライバシーを尊重することも学んで いかねばならない。子供は生まれつ き自己中心であるが、他人は自分の ためにあるのはないこと、自分たち と同じように優しく扱われるのに値 することを徐々に「発見」してい く。このゆっくりとした成長は無数 の細かいことに具体化される。例え ば、部屋に入る前にノックする(当 然、答えがあるまで待つ)ことを教 える。あるいは大人だけで話がある ので、子供たちは外に出るように言 われたときは部屋を出て行かねばな らないことを説明する。また、他人

の部屋のタンスや棚に何があるかを 全部調べたいという欲求(小さい子 供にはありがち)を抑えることを教 えねばならないだろう。このように して、他人のプライバシーの範囲を 尊重することに慣れていき、かつ自 分のプライバシーを発見していくの だ。こうして、大きくなってから他 人をその人が神の子であるがゆえに 尊重するだけでなく、自分もそのよ い慎みを持つことができるための十 台が据えられる。「人と父なる神の 間にある、よいキリスト教徒になろ うとするべき子供とその子を腕に抱 きしめる聖母との間にあるプライバ シーのために霊魂の奥底をとってお こうとするよい慎み」(聖ホセマリ ア、『ピラールの聖母』)である。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント <u>https://opusdei.org/ja-jp/article/tsutsushimi1/</u> (2025/12/19)